俺が望む最高のハッピーエンド

@ndante

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺が望む最高のハッピーエンド

【Ｎコード】
Ｎ８８８６Ｘ

【作者名】
@ｎｄａｎｔｅ

【あらすじ】
青春。
高校時代。
きっとこの時期に経験することはそれからの人生に大きな影響を与える。
一生の友人を得たり、誰かを好きになったり、そして後悔を覚えたり。

プロローグ（前書き）

この作品のエンディングは読む人にとっては納得行かない形になるかもしれません。
それをご了承下さい。

それでは私の処女作をよろしくお願いします。

プロローグ

今年の夏も例年通り茹だるような暑さだ。作業部屋である四畳半程度の洋室で、L字型の机に向かいながら、そろそろ扇風機だけじゃキツイか？冷房あった方が仕事捗るよな？などと、誰が聞いているわけでもないのに、言い訳を浮かべた。

「地球温暖化め…」

雇い主である父親から回されてきた仕事に、集中出来無いことを環境に八つ当たりしてみたが、そんなことで集中出来る筈もなく。

「はぁ休憩にしよう」

気分を変えるため、備え付けのミニ冷蔵庫からアイスコーヒーのペットボトルを取り出し、コップに注ぐ。勿論余計な物は入れない。

「そういやいつからコーヒーをブラックで飲み始めたんだっけか」

覚えていないがどうせ大人っぽいから、とかそんなくだらない理由だっただろう。今もあまり成長していないが、昔は今以上に子供っぽく、ちょっとした事でも自分の思い通りにならないと不機嫌になった気がする。

（学生時代は酷かったな。特に高校時代なんて…）

思い出して苦笑が出てくる。高校時代、特に後半は色々なことがあって、色々経験した。当然ながらそれが無かったら今の俺は居な

かっただろう。
逆に今の俺が当時の俺だったらもっと上手く立ち回れただろう。
それに新たな経験が出来るかもしれない。
（まぁ一回経験してるんだから当然か）
益体もない“もしも”の想像をしてしまったことにさらに苦笑を深くする。
いい経験だ、と言えるほど大人になった。しかし、それでも一つだけ心残りがある。
たった一つの約束、それを果たせなかったこと。その心残りが今も胸の奥で棘のように刺さり中々抜けてくれなかった。

◆

俺は今体育館にいる。
壇上で男女に分かれ歌を歌っている。
指揮者を見ながらたまに左右、男女が目でタイミングを合わせたりしながら合唱をしている。
そんな中俺は彼女と目を合わせ、笑いながら楽しそうに歌を歌っている。

俺は今廊下で呼び込みをしている。
今日は文化祭。
クラスの出し物の宣伝をするために駆り出されているのだ。
そんな中俺は隣で一緒に呼び込みをしている彼女と楽しく呼び込みをしている。

俺は今体育館で整列している。
今日は生徒総会だ。
新役員になってから初の生徒総会ということもあって、壇上の役員達は気合十分のようだった。
そんな中で俺は壇上にいる彼女を眺めながら眩しさとどこか寂しさを感じていた。

俺は今夢を見ている。
そう気が付いたのは何時だっただろうか。今見ていた光景は昔の記憶だ。
先日高校時代を懐かしんだせいだろうか、その時期をピンポイントで見せられた気分になった。

“藤田智之くん”

いつの間にか目の前に女性が立って居て、俺の名前を呼んでいた。
どこかで見たことがあるような、懐かしいような、胸が苦しいような、そんな気持ちにさせる女性だった。

“藤田くん、智之くん、智くん”

そう呼ばれて目の前の女性の印象が合致した。

“ごめんね？それと”

“ありがとう”

◇

『おい！聞いてるのか！？』

受話器越しに聞こえる友人の大声に意識が覚醒する。自分が一体何をしていたのかを思い出し友人に返事をする。

「あ、ああ聞こえてる」

友人は呆れたような声でこちらの様子を伺ってくる。

『信じたくもないのは分かるが気をしっかり持てよ？』

「ああ悪い、分かってる」

受話器の向こうで友人が一度唾液を飲む音が聞こえた。向こうも落ち着いているわけではないようだ。

「で、いつになるって？」

喉がやけに渇いて口の水分を無理矢理集め、飲み込み、たった今友人から告げられた言葉を自分に言い聞かせるように繰り返す。

「その…」

「夕紀の通夜は」

夢を見たその日、友人から彼女の訃報が届いたのだった。

ー大西夕紀ー

高校時代の彼女。きっと今まで好きになった女の子の中で、一番今の自分に影響を与えた子だと思う。
そのせいか、その後付き合う女性と夕紀を知らず知らずのうちに比べてしまい、頬を叩かれる経験も少なからずあった。
きっと誰にでもいると思う忘れられない存在。いつかまた、当時を若気の至りなどと笑いながら、お酒でも飲めると思っていた存在。
そんな彼女の通夜へ向かっている。

「あ、そこで停めて下さい」

タクシーを通夜の式場近くで停めてもらいながらも、なぜこんな事になったのか。と、友人から連絡を貰ってから今日まで、ずっと考えている事をまた浮かべる。

「遅かったな」

料金を払い、タクシーから降りてすぐ、後ろから聞き覚えのある声に呼びかけられた。

「幸宏か」

高校時代友人がほぼ居ない中、幼なじみなどを除いてほぼ唯一と言って違いない俺の友人。
鈴田幸宏。この優男とは当時そんな関係だった。まぁ当人は親友を

言い張っていたが。

「待ち合わせ時間ぎりぎりだぜ？」

「ああ、仕事が中々上手く行かなくてさ」

「おお、おおそれはご苦労様で。今何やってるんだっけか？」

ここ数年、殆ど顔を合わせていなかったとは思わせないその態度に、俺は苦笑いを隠せなかった。しかし、高校時代は茶髪でピアスと着崩した制服姿だったが、今は社会人らしく黒髪に喪服をしっかり着ていた。

「今は父親の会社の下でデザインをしてるよ。まぁ、オヤジが現場の人間だから色々融通効いてね。楽させてもらってるよ」

暗くなっていた内心を隠すように軽口で返す。あまり心配させるのも心苦しかったし悔しかった。

「お、あそこか…」

「…そうみたいだな」

お互いの近況など軽く確認していたら式場に着いてしまったようだ。

「あー…っと、それじゃまた後でな」

「？…ああ気を遣わせて悪い…」

「気にすんな。これも昔に比べれば、な」

「悪い…俺が呼んだようなもんなのに」

幸宏にこうやって心配されるのは一体どれほどぶりだろうか。

「こんな日ぐらい良いだろうに。なんでこうなるんだろうな…」

幸宏が言っているのは周囲、おそらく高校時代の同級生達が向ける視線だろう。嫌悪、侮蔑、憎悪、色々混ざってるが凡そ、そんな視線。視線の対象は俺だ。

「もう慣れたし気にすんな」

「だけどよっ」

そう言いながら、興奮しかけた幸宏を置いてその場を離れる。

幸宏と別れた後、一人記帳を済ませ焼香の列に並んでいる俺は、少しずつ前に進んでいく中、焼香台の向こうにいる喪服に身を包んだ一人の女性と眼が合った。

「…！？」

その驚き様を見る限りでは、どうやら俺が通夜に来るとは思っていなかったようだ。その女性、大西夕紀の母親は、俺が焼香する番になりお辞儀をすると、驚きに開いていた眼を涙で一杯にしながらしきりに頭を下げていた。

焼香も終え二階で幸宏を待ちつつ、出された食事に手をつけていると、見たことのあるような雰囲気の女性が近付いて来た。

「あんたも来ていたのね」

「まぁな」

学生時代よりも少し長くなった黒髪を後ろで一つに結んでいたが、

印象的なそばかすとつり目がちな目は当時の面影を残していた。
「良く来れたわね。あ、いや来るなって意味じゃなくてほら、ね？分かるでしょ？」
「まぁこの状況見れば分かるさ」
俺が座っている席の周りには誰も座っていなかった。テーブルに置いてある大皿のお寿司も独り占めだ。
「あ～、まぁお陰で見つけやすかったんだけどさ。言ってて辛くない？」
「もう慣れた。幸宏にも同じようなこと言ったな」
「お、居た居た」
「噂をすればなんとやら…」
嫌そうな顔と声で目の前の女性は振り返った。その先では人の良さそうな顔をした男が、こちらに向かって歩いて来ていた。
眼の前の女性、木村理恵は夕紀の幼なじみであり、俺も仲良くさせてもらっていた。
男で唯一の友人が幸宏だとすると女で友人でいてくれたのが理恵だった。
「さて、俺がここにいると空気が悪くなるしそろそろ…」
「待ちなさいよ」
「？」
立ち上がり、幸宏の方へと向かおうとした俺の腕を理恵は掴んでいた。
「夕紀のママがあんたに夕紀の顔を見て行って欲しいって」

「最後だから」

「！？」

最後にという言葉に今まで忘れていた感情が噴き出して来るような感覚が起きた。

「最後に…」

「そうよ。最後よ」

さっきまでの強気な表情を消し、真剣な眼を俺に向けながら言う理恵に何とか言葉を返そうとするがなかなか出てこない。

「おい、何してんだ？」

「…分かった。連れていってくれ」

「おいおい何の話だよ一体？？」

幸宏の声に背を押されるように、俺は覚悟を決めた。

「こっちに来て」

幸宏に事情を説明し三人で一階に降り、さっきまで焼香の列が居た横を抜け棺に近付く。

その際、夕紀の母親ともう一度あったり遺族と顔を合わせたが、きちんと挨拶出来たか記憶が曖昧だ。

そして遂に棺の横まで辿り着いた。

棺の顔の部分にあたる扉は開いていた。

そこから顔を覗く。

そこには俺の記憶より少し痩せ大人の雰囲気を持った大西夕紀の顔があった。

やはり夢で出てきた女性は夕紀が成長した姿だった。

とても綺麗に化粧され眠っているような顔で。

光を失った栗色の髪の毛。今は閉じられている、笑うと弓のようになった大きな目と薄い口。その口から二度と聞けない優しげなトーンの声。

それを見た瞬間俺の中で何かが決壊した。

「うっ…くっ……っ……あっ…」

そこで漸く、俺は大西夕紀という女の子が、もうこの世には居ないということを実感した。

「…」

流れる景色は式場を出る頃に降りだした雨に、濡らされながらも段々と懐かしさを帯びてきた。
ひとしきり友人の前で醜態を晒した後、俺はいつも使っている電車では無く、昔高校時代使っていた路線を使い家を目指していた。
哀愁というわけではないが、今日ぐらいはそんな事をしていいのではないか、と自分の女々しさを肯定した。
懐かしさを感じる中で、俺は夕紀との出会いを思い出していた。

（高校二年で初めて同じクラスになって、恋人の悩みを聞いたりしているうちに仲良くなって、それが切っ掛けでお互いに惹かれ合ったりして…）
（実は中学の時に同じ通夜に参列していたなんて事を付き合ってから知って、二人して運命だなんてはしゃいでさ）

そうだ、初めて夕紀を見たのは中学二年の春、知人の通夜だった。
中学一年の時たった数カ月しか一緒に勉強しなかったが、たまたま隣の席になって仲良くしていた病弱な子。

（あの子の通夜の時もこんな雨だったな）

“次は鎌子、鎌子。お降りの方はお忘れ物ご注意ください”
懐かしい響きの駅が近くなったなと意識を外に戻して景色を見ようとした。その時
ガツン

そうとしか聞こえない鈍く重い音と共に、ドアに寄りかかっていた体が何かに躓き引っ張られるように電車の進行方向に流れた。
そのまま俺は、迫ってきた地面、手すり、前の壁とぶつかり転がり滑った。

プロローグ（後書き）

高校時代。
この頃に経験する恋愛は良くも悪くもきっと心に深く残るはず。

第一話　二度目の出会い（前書き）

もしも願いが叶うなら

第一話　二度目の出会い

◆

教室は様々な声で賑わっていた。各々自分の机や、友人の机の周りで、自分の持ってきた予備の学校指定Ｙシャツに、自分の手や友人の手を借りたりして飾り付けをしている。

週末の合唱コンに着る自分の衣装を作っているのだ。

学校行事ということで、過度な装飾はできないが、各クラスそれぞれ曲にあった飾り付けをするのが通例だ。

『藤田くん聞いてる??』

俺は自分の椅子に座りながら、ぼーっとしていたようだ。

『ああ、悪い。で、何をすればいいんだっけか?』

『私のＹシャツに何か書いてくれる?』

ピンクの極太マジックを振りながらこちらを伺ってくる。

『了解。なんでもいいのか?』

『空いてるスペースだったら何でもいいよー。でもなるべく可愛いの書いてね??』

目の前に居るこの子は、こういった作業が楽しいのか、本当にニコニコとして眼が輝いている。

『これで…よし』

『なんて書いたのー??』

『ワライダケ』

『なにそれーーーーっ！！』

言っていることは否定的だが相変わらず顔は笑いっぱなしだ。

『藤田くんてそういう人だったんだねー。今まで気が付かなかったよ。おっかしいのー』

そう言いながら、笑いつつもこちらを非難してくるこの子は、本当に笑顔の似合う子だと思った。

◇

ジリリリリ！

「くっ…」

耳元でけたたましく鳴る目覚まし時計を、手探りで止めようとするが、いつもの場所に無い。

「？？？」

寝ぼけながら音の発生源を探してみると、窓のサッシに目覚まし時計が斜めに傾いて置かれていた。それも絶妙なバランスで。

いつもなら、枕の横にあるはずの目覚まし時計が、そんな離れた場所にあることに疑問を感じながら、スイッチを切り時間を確認する。

七時五分。まぁ仕事するにはまだ早い気がするが飯を食って、朝風呂浴びたら丁度良い時間帯になるだろう。

「しっかし変な夢を見たな…ふぁ」
脳に酸素を送るために欠伸が出る。
「ともーーー起きてるのーーー？」
「ん？？」
するとなんの幻聴か、母親が俺を起こす声がする。
「朝御飯食べる前に、顔洗ってきなさいよーーー！」
幻聴ではないらしい。母親が一人暮らしの俺を心配して様子を見に来たのか？いやちょっと待て、そんな習慣はなかったはずだ。急ぎの仕事でも持ってきたか？
仕事と言えば何時の間にベッドで寝たんだろう。昨日の記憶も曖昧だ。
「昨日は仕事が捗らなくて…」
思い出せる部分が仕事からというのが寂しいが仕方ない。浮ついた話しなんかここ最近出たこともない。女性といえば。
「そうだ、夕紀の通夜に行って…」
コンコンッ　ガチャ
「あら、起きてるなら返事ぐらいしなさい」
「あ、ああ悪い。考え事してて」
辛うじて返事をしたが、よくよく見ると違和感だらけだ。まず、今母親が入ってきた扉。見覚えはあるが俺の住んでいる部屋の扉ではない。次に、なぜか母親が少し若い。もっと中年太りというか、

ふくよかになっていたはずだ。急にダイエットが成功して痩せた？
そんな訳がない。
そして少し周りを見回せば。

「なんだ…？」

そこにあるのは、今はもう見ることもない俺の所持品や家具、以前住んでいた俺の部屋があった。

「起きたならちゃっちゃと支度しなさい」

と、言われ。周囲の違和感よりも先に目の前の問題に気が向いた。
なぜ母親が俺の部屋に居るのか。
何かの用事に俺が遅れたから迎えに来た？いや待て、何処かへ出かける用事なんかあっただろうか？だとすればなんの支度だろう？
と、少し考えたが。

「学校遅れるわよ？」

その言葉で今まであった違和感と、母親が俺の部屋にいる事に繋がり、一致したような気がした。
そうだ、今俺が居るこの部屋は、高校時代住んでいた家の自室そのままなのだ。
高校時代に幼なじみの気まぐれで買わされたテニスラケットや、カードゲーム。週刊誌に付いてきたグラビアのポスター。
そしてさっきの目覚まし時計の位置。高校時代は寝起きが悪く、いつまでも布団から出ない為、窓のサッシに時計を置き、寝ぼけ眼で止めようとすると床に落ち、延々と鳴り続けるというトラップじみた仕掛けにしてあったんだ。
何度目を凝らしても、そこにあるのは高校時代の部屋だった。

目が覚めたら高校時代の部屋で寝ている。何が起きてるのか分からないまま、学校に送り出された。
せめて自分の状況を調べようと高校までの道のりの中で所持品や携帯電話の日付などを確認すると、どうやら高校二年の夏休み明けのようだった。

（一体何なんだ？）

頭もすっかり起きたので、昨日の記憶を探っても、通夜のあと電車に乗ったところまでしか思い出せず。それに輪をかけて高校二年までの鮮明な記憶が混じり余計に訳がわからなくなっていた。

俺の通う鎌子高校は、最寄りの駅から少し離れた小高い山にあり、その一部を平らにしたような土地に建っている。
その為最寄り駅までは電車、その後はバス通学になる。勿論毎朝の満員バスが嫌な生徒は少し早く出て徒歩で通学することも出来る。
俺は少し遅い登校になったのでバスだった。

「ふぅ、取り敢えず学校には着いたが…」

バスが進む間も、懐かしさと苦痛に現状に対する困惑が入り混じり、微妙な心境だった。
しかし学校に着いた途端、そんな薄曇りだった心境も懐かしさが大

半を占め、少し光が差すようになっていた。
「おはよー」　「あ、おはよう」　「おはおは」　「おはよう」
校門から教室に向かう間にも色々な相手と出会ったりもして、この状況に対する気持ちはもはや限りなく楽しさに変わっていた。

「みんなおはよーう」

しかし、そんな心境が一気に落ち着いていくのを感じた。俺の後ろから廊下に響いたのはとても懐かしい声だった。

「おはよう」

聞こえるかどうか分からない返事を返したが、声の主は栗色のロングヘアーを靡かせながら、もう自分の教室に入っていった。そして、そこに俺も続くように入っていった。
〈二年三組〉
俺が高校二年の一年間使っていた懐かしい教室だ。
そして、友人である鈴田幸宏や木村理恵、そしてたった今同級生に元気な挨拶をして行った大西夕紀の居たクラスだ。

その日俺は、一日中自分に起きている現象について考えていた。
考えていて分かったことは。
まずなんの冗談か頭の中には二種類の記憶があった。一つは今から数年後まで生きた記憶。これから起こるであろう出来事や事件、そんなものを経験した記憶だ。どちらかと言うとこちらのほうが実感もできるし俺の記憶と言って良いだろう。今の状況に違和感を感じるのもこっちが主観のせいだろう。
もう一つは高校二年までの記憶。さっきあげた俺の記憶では曖昧

だったり、忘れていた記憶を、より鮮明に具体的に思い出すことが出来た。これは多分この身体の記憶なんじゃないかと推測した。随分思春期っぽい表現だが、区別しやすく分かりやすいのでいいと思う。俺は厨二病じゃない俺は厨二病じゃない…。

そして記憶の他にも色々分かった。

それはこの状況が夢でも何でもない、紛れも無い現実だということだ。

夢なら痛みを感じることはない。ということで、授業中居眠りしている感じを装い自然に頭を机に落としぶつけてみたりしたが、とても痛かった。そして心配された。

夢ならばその中で寝れば、起きた時は夢から覚めるだろうと思い、授業中、自然に居眠りしたが。目が覚めた時、眼の前には教師の顔があっただけで状況は変わらず、夢から覚めることはなかった。むしろあの恐怖は夢であって欲しかった。

この俺の状況は夢では無く、紛れも無く現実だということだ。

「そうか、これが夢じゃなければ…いや、出来の良い夢でも良いんだ」

俺は漸くここに至ってある事に気が付いた。

それは。

「もう一度夕紀とやり直せる。夕紀を俺の手で幸せにすることが出来る」

そんな事を思ったのだった。

そうは言ったものの、俺の記憶では夕紀と親しくなるのはまだまだ先だった。
時期的にもうすぐ始まる〈学内合唱コンクール〉そこで仲良くなり始めるはずだ。
それまでは接点が殆ど無いただのクラスメイトに過ぎない。どうにかして早く夕紀と会話をする必要があった。出会いや親しくなるスピードが早ければ早いほど夕紀との時間が多くなり思い出も増える。

そしてチャンスは思ったよりも早く巡ってきた。

◇

「それでは再来週末に開催する合唱コンのパートリーダーを決めます。まずは立候補。居ないかー居ないと先生決めちゃうぞー」

教壇の上では担任が緩く脅しを掛けながら教室を見回している。
窓際の後ろの方に位置する自分の席から周囲を観察しながら、そっと夕紀に視線を向ける。

（確か、夕紀はソプラノリーダーだったはず）

「はい！」
「お、大西。リーダーになるか？」

そうこう考えているうちに、夕紀は手を上げていた。立ち上がり手をあげた拍子に、栗色の髪がふわりと揺れる。元気が良すぎるせいか髪が後ろの男子に当たり、後ろを向き謝っていた。

「ごほん、気を取り直して…」

恥ずかしかったのか、顔を若干赤くしていた。それを誤魔化すためかいつもより余分に元気に声を発した。

「私と理恵が女子のリーダーやります！」

「え！？」

突然自分の名前を呼ばれたからか、女子とは思えない声が俺の斜め後ろからした。

「では女子ソプラノとアルトは決まったな。男子早くしないと帰れないぞ？」

「ちょっと先生！あたしはやるとは言ってません！」

振り返ると、肩口で切りそろえた黒髪を振り乱しながら抗議している。が、誰も聞いてはいない。

「おーい男らしくないぞー」

「ちょっとー、男は酷いんじゃないー？」

「そうよそうよ、理恵はちょっと男勝りなだけなんだからー」

「どっちにしろ二言はないだろー」

「あんたらは黙ってなさい！！」

周りのクラスメイトからからかわれているが、これもある意味人望だ。それに、反応するからからかわれるんだ。そう心の中で理恵に手を合わせた。

早くに夕紀と仲良くなるには、同じ立場になって、共有する時間を増やした方がいい。そうだ、こんなチャンスを逃す理由はない。

騒ぎが収まって、余計な邪魔が入らない内に、俺も手を上げる。

「んじゃ、早く帰りたいんで俺テノールやりますよ」

「それじゃ次のＬＨＲ（ロングホームルーム）までに、各パートである程度の歌い合わせはしておくように。では解散」

そう言って担任は教室を後にした。そして後に残ったのは俺と夕紀と理恵、あとはもう一人の男子リーダーだった。なぜか幸宏は俺の推薦を蹴り、早々に教室から出て行っていた。

「そういえば、あいつ…最近俺に声掛けてこないな…」

よくよく考えてみれば、俺がこの状況になってから一度も声を掛けられていない。今まではそんなことなかったのに。

「？藤田くん何か言った？」

「い、いやなんでもない」

危うく独り言の大きな変な奴だと思われるところだった。そんな変な印象は必要ない。

「それにしても藤田くんが立候補するとは思わなかったなー」

「確かに。藤田って言えばクラスでも大人しめで、言っちゃえば暗い方だと思ってたし」

「理恵！」

「あんたなんで立候補したの？」

「そんな言い方失礼だよ！？」

親しくなっていないクラスメイトからはそんな印象だっただろうと思う。まぁ一年次からのクラスメイトなんかとは騒いでいたので、よく観察していれば印象も違っただろうが。まぁでも興味の無い相手を、観察するわけがないのでそんな印象なのは仕方ない。

「いやーそうでもないよ。こいつ割りとよく喋るし？面白い事もたまに言うらしいし、な？」

もう一人の男子リーダーは、俺の事をどっかで聞いたのか、そんな事を俺に言ってきた。

「たまに、っていうのは全くフォローになってないだろ」

「ふふ」

その遣り取りに、クスクスと笑いを堪えているのは夕紀だ。横で理恵は訝しげに俺を見ているが気にしない。ここで理恵に突っ掛かって、夕紀に悪印象を与えても良い事はない。

そうこう考えていると、夕紀が好奇心を刺激された小動物のように、とことこと近付いて来た。

「藤田くんはまず髪の毛切りなよ。そうすれば少しは印象変わるんじゃないかな？？」

そう言って遠慮なしに、俺の前髪を摘んで少し引っ張ってくる。

今の髪型は、大分伸びていて前髪が眼にかかるぐらいだった。そういえば夏休みどんな髪型にしようか悩んでいて、とりあえずどんな髪型でも出来るように、と髪を伸ばしっぱなしにしていたら、夏休みが明けてしまったのだった。

「確かにあんたの髪型、暗そうな感じだもんねぇ」
「確かに見た目暗いな」

理恵の容赦無い突っ込みと、それに追随する男子。言っておくが、断じて名前を忘れているわけではない。ただ単にこいつの名前を呼びたくないのだ。俺の記憶では、最終的にこいつが切っ掛けで俺と夕紀は別れている。
我ながら器が小さいとは思うが、一年後を考えるとこいつとは今のうちに縁を切っておきたい。

「まぁ今日帰ったら美容院行ってみるわ」

そう言って俺が鞄を持つと、残された三人も鞄を持ち、その場の流れで一緒に教室を出た。

「どんな髪型がいいんだ」

男子Aと嫌々並び歩きながらそう呟いた。
俺等はバスには乗らず歩きで駅を目指しいた。バスに乗ろうとした俺を夕紀が歩こうと誘ってきたのだ。どうやら立候補した事が余程意外だったのか、そのお陰で少しは俺に興味を持ってくれたようだ。その時『最近少し体重が…』と言っていた。よく聞こえなかったが、誘うのを恥ずかしがっていたのだろう。
呟きが聞こえたのか、少し前を理恵と手をつないで歩いていた夕紀が、こちらに振り返った。

「バッサリ行っちゃいなよー」

手をハサミの形に動かしながら、笑顔でそう言った。
「ほら夕紀！後ろ向きながら歩くと危ないわよ！」
「わっ！？おっとと」
歩道の縁石に足を取られ、よろめいたが理恵が上手いこと引っ張り支えた。
「えへへ、ありがと理恵」
「もう慣れたわよ。夕紀のどっか抜けてるところなんて」
「あ、ひっどーーーい！」
そう言いながら、仲良さそうに握った手を振り回している夕紀を見ながら俺は決意を新たにした。

◇
「おはよう」
「うん、おはよー…」
次の日、教室で夕紀に挨拶をすると驚いた表情をしていた。
「わー…」
「髪、言われた通りに切ってきみたんだけど？」
「うんうん。なんか印象が変わっててびっくりしちゃったよ」
そう言いながら俺の周りをグルグルと回り始める。たまに『ほう

ほう』などと漏らしながら。
これは昔も言われたな、と少し感慨深くなった。
「それで、どうだろ？少しは良くなったか？」
「うん、今のほうがカッコイイよ」
「そっか、大西にそう言ってもらえて良かったわ」
「私に？なんで？」
「昨日木村が聞いてきただろ？パートリーダーに立候補した理由」
「うんうん」
夕紀に誉められたからか、二度目の出会いが順調だったからか。俺は何も考えずに今の興奮のまま喋っていた。
「実は大西と仲良くなりたかったからなんだよね」
「え？？」
「ずっと前から気になってて」
この時から、俺の思いとは裏腹に未来は歪み狂い始めた。そうとも知らずに俺は得意になって口を開く。
「でも、私彼氏いるよ？？」
「分かってる。でも仲良く出来るに越したことはないだろ？」
二度目の出会い。巡ってきたこのチャンスに、俺は自分では気が付かないほど焦り、浮かれすぎていた。そしてなにより自分の気持ちに振り回されていた。

「そうすればいつかチャンスが貰えるかもしれないだろ？」

「大西を幸せにできるチャンスが」

自分の失態にも気が付かないほどに。

第一話　二度目の出会い（後書き）

もう一度やりなおしたい

第二話　二度目の失敗

その日から俺は夕紀と話す時間をなるべく多く作るようになっていた。

「大西おはよう。今日はちょっと遅いんだな」
朝のＨＲが始まる前や

「あれ大西？今日は弁当じゃないのか？なにかオカズ貰おうと思ったんだが」
昼休み

「ソプラノの方は調子どうだ？良かったらテノールと一回合わせてもらえないか？」
放課後は勿論の事

「さっきの授業の最後の問題出来た？ちょっと教えてくれない？」
授業の間の少ない休み時間でさえも何かに突き動かされるように距離を近付けようとした。
しかし、そんな性急な態度の変化を周囲が受け入れてくれるはずはなく。次第に怪しくなっていく雲行きに周囲は警戒を強めたのだった。

「なんか最近あいつウザくないか？」
「あんな奴だっけ？」
「あからさま過ぎて気持ち悪いわ…」
「誰か止めなよ」
「確か一組にあいつの幼なじみが居るだろ。誰か呼んでこいよ」

そうして数日経った後、呼ばれた幼なじみに止められ忠告を受ける。

「待て待て待て。冷静になりなさい。そんなんじゃ逆効果だよ！」

そこで、漸く自分が予想以上に、この有り得ないチャンスに浮かれていた事に気が付いた。

「なにやってんだ…っ！」

放課後の教室で、窓から見えるテニスコートを眺めながら、肺に溜まった空気を全て吐き出すようにため息を付く。

俺と夕紀の関係改善は悪化の一途だった。ここ数日、放課後に学内合唱コンクールの打ち合わせなどをする時は声を掛けることが出来るが、それ以外の場面では理恵が睨みを利かし近寄れないようになっていた。

元々ニコニコと笑顔を絶やさず明るく、誰にでも気さくな夕紀は、周りの反応が悪くてもそれなりに会話はしてくれていた。それも、苦笑をしながらだったことに、今冷静になると気が付く。

だが今日になって、俺との話が彼氏にまで届き少し喧嘩した、と噂になってからは理恵がボディガードやＳＰのように、俺を見張る

ようになった。いや、これも冷静になれば当然の対応なのだが。

「これはどうしようもないな…」

「ホントにどうしようもないね～」

俺にとっては聞き慣れ過ぎて、もはや心落ち着くＢＧＭのように聴こえる緩い声で背後から話しかけられた。

「祐也か」

幼なじみである青木祐也だった。祐也は天然パーマがかかった柔らかそうな茶色い短髪を、風に揺らしながら俺を同じように窓へ近付いてくる。

「祐也か、ってのは酷いんじゃないかな？折角たまには一緒に帰ろうかと思って誘いに来たのに」

「部活どうしたんだ？テニス部だろ？」

「ん～、まぁ部活行く気分じゃないってとこかな？」

こいつにまで気を遣わせているな、と少し情けない気分になる。中身の年齢は成人しているのになんだか、こいつには頭が上がらないような気がする。

「んじゃ帰るか。明日になればまたいい考えも浮かぶだろう」

「トモ、お前さんはもう振られたんだからもう諦めなよ」

比較的親しい人間が使う“トモ”という呼び方。

そんな響きに少し元気を貰いながら教室を出た。もはや日中の白さを失い朱が混じっているリノリウム製の廊下を歩くと。

「あ、」

廊下の先、体育館に続く方向から声がした。

体育館と教室を結ぶ廊下。途中を曲がると階段がある。その階段よりも少し教室寄りに、部活のユニフォームを着た夕紀が居た。体育館から教室に向かう途中だったのだろう。だが、俺に気付き声をあげたようだった。

「大西さんってバド部なんだね」

横にいる祐也の呟きを聞きながら、俺は足早に夕紀とすれ違い階段へ向かう。

冷静になった今では、これまでの自分の行動が恥ずかしく思えて、まともに顔を合わせられなかった。

階段を降りていると後ろで、少し低い男性の声で夕紀を呼ぶ声がするのが聞こえた。

それは紛れも無く、夕紀の彼氏である先輩の声だった。階段に響くその声からなにやら剣呑な雰囲気を感じ取った。祐也は仕切りに振り返っていたが、それでも俺は足早に昇降口を目指したのだった。締め付けるような胸の痛みを感じながら。

◇

そして合唱コンクールは大きな事件もなく終わり、俺は夕紀との接点を失くした。二度目の出会いは最悪の形でスタートしたのだった。

そして、それからも関係の改善を望めないまま、秋になり高校生活の一大イベントとも言われる文化祭シーズンを迎えた。

◇

文化祭準備期間になり、俺もクラスメイトと教室で文化祭の為に作業をしていた。

「なんでうちのクラスは、こんな出し物なんだよ…」

クラスメイトが愚痴っているがそれも仕方ない。我がクラスの出し物は創作人形劇なのである。しかも脚本は担任。

「担任が童話好きな時点でなんかマズイ気がしてたんだよな俺」
「いい歳して童話ってなんだよ」
「まぁでも自分たちが出るわけじゃないだけマシじゃないか？」
「確かに。ホント、体育館借りれなくて良かったなぁ」

クラスメイトも口々に愚痴を吐いているが、担任は元々は演劇をやりたかったらしい。
だが体育館を借りられなく、仕方ないからといって教室で人形劇をやることにしたそうだ。
しかし、普通こういう出し物って生徒が案を出して多数決とかで決めないか？そんな疑問を飲み込んで、今はその人形劇で使うセット作りに勤しんでいるのであった。

「でも」

周囲の目が自分に向くのを感じた。

「藤田がこういうの作るのが得意で助かったな。設計から何から全部丸投げだもんな俺ら」
「ホントホント。中学じゃ技術の授業とかで工作なんかしたけどさ。いきなり舞台作れとか言われて無茶だと思ったぜ」
「助かったぜ藤田」
「…まぁうち父親が職人だから日曜大工ぐらいの規模ならよく作るし、なんとかね」
「お前を少し見直したよ」

そう言いながら、体育会系の男子が肩を思いっきり叩いてきた。このところの俺に対する不評は、男子に限り薄らいでいた。舞台などのセットを男子に割り振ったのは良いものの、中々作業が進まずにいた。仕事で施主にデザインを説明する時のように、その場でちょっと軽い設計図を作ってみたところ、それの評判が良かったのだ。完全に裏技を使っているわけだが。それで作業がうまく進むなら使わない手は無かった。

多少ぎこちないながらも和気藹々と作業が進んでいたのだが、その空気が一瞬で萎んでいった。

「男子しっかりやってるの！？」

家庭科室で人形作りをしていた女子が戻ってきたのである。近年、女性の自立志向による男性社会への進出、浸透は著しい物があり我々男性の威厳や立場といったものはゴニョゴニョ……閑話休題。

とにかく俺の居る学校も女子が実権を握り、男子は、なるべく逆らわないように動いているのである。それは生徒会役員がほぼ女子で構成されている事にも伺える。

そんな中では、いくら男子との間にある壁が低く、薄くなってきたとしても、女子との壁はどうしようもないほどになっていた。
男子もそれを分かっている為、女子が入ってきた時に、俺との距離を少し開けている。

「藤田もサボってないでしょうね？」
「木村、いくら俺でもこれ以上不評を買いたくはないさ」
「そう」

相変わらず理恵は夕紀のボディガードである。文化祭後の生徒会選挙にも付いていきそうだ。

（前の時はそんなことは無かったが今回は俺がやらかしたからな。有り得そうだ）

「理恵、流石にそれは言い過ぎだよ！」

理恵の後ろに居たのだろう。夕紀が前に出てきてフォローしてくれるが、そのフォローがまた周りの俺に対する目をキツくさせる。

「こっちは順調だから、ささ、お嬢様方はお人形作りにお戻りください」

多少の嫌味を込めてしまう事に、まだまだ俺も子供だなと思いながら退出を促す。

「ちょっとあんた！最近手の平返したように夕紀の扱いが雑になってない！？」
「付きまとって欲しいのか、距離をとっていいのかどっちなんだお前」

「なんか言った！？」

幸い俺の呟きは聞こえなかったようだった。なので、俺は再度退出を促した。

◇

そんなギスギスした日常を繰り返しながら迎えた、文化祭初日。
俺は教室のドアの横で、自分が設計した舞台で演じられる人形劇を見ていた。
真っ暗な教室の中、ライトに照らされている人形劇の舞台。横長の長方形に切り抜かれた舞台で、夕紀がヒロインを演じていた。
物語も佳境に差し掛かり、ヒロインが王子様に再会するところだ。

「僕はあなたともう一度出会うために幾つもの世界を渡って来ました」
「私なんかでは、あなたのような高貴なお方と釣合いません…」

この物語はファンタジーの世界に迷い込んだヒロインと、その国の王子様との王道恋愛物だ。
今は、自分の世界に帰ってしまったヒロインを追って、様々な世界を渡り歩いた王子が今漸くヒロインに再会したという場面だ。

（俺もこんなエンディングを迎えたいんだけどな…）

苦笑気味にそう思った。だがやはり現実は厳しいものだった。今考えても、当時すでにクラスの人気者であり、後の生徒会副会長として生徒を仕切る女の子である大西夕紀と、一般生徒で何の変哲もな

い帰宅部だった俺が、良くもまぁ付き合えたものだと思う。
（やっぱり俺達の巡り合わせって、色々と奇跡的な流れにあったんだな）
人生は偶然の積み重ねだ、なんて哲学的な事を考えていたら教室が明るくなった。
『ご来場の皆様。本日はお越しいただき誠にありがとうございました』
教室にマイク越しのアナウンスが響く。どうやらいつの間にか人形劇は終わっていたようだ。
お客さんが次々と教室から出て行き、後に残ったのはクラスメイトだけとなった。
今日の公演は今の回で終わりだ。あとは明日の打ち合わせや、今日の反省、今日の片付けを残すのみだった。

「それじゃあ反省これぐらいにして、また明日の一般開放ためにチャッチャと片付けちゃいましょうか！」
その掛け声と共に、女子は客席側から見て向こう側、舞台の付け根に隠して置いてあった人形を片付け始めた。
男子はガムテープなどで動かないように固定してあった舞台や設置してあった照明装置など重量がある物を運ぶため動き出した。
「舞台向こうに寄せちゃうから、そっちのガムテ外してくれないか

？」
「ああ、了解」

「あれ？人形一個足りなくない？」
「あ、舞台の下にあるよ。取ってくるね」

俺は客席側から舞台を照らしていたライトなど、照明器具を運んでいた。

「あ」

誰の声か分からないが、そんな声に振り向き見たのは、しゃがんだ夕紀の背中に倒れ掛かっていくベニヤ製の舞台だった。
いくらベニヤと言えども、骨組みは木材で組んであり舞台の横幅もそれなりにある為、男子三人ほどで動かすぐらいの重量がある。特に観客から演者を隠す部分は、重心を取るため少し重めに作っていた。
それが何故かバランスを崩し、ゆっくりと夕紀覆いかぶさろうとしていた。

「何やってんだっ！」

俺は持っていたスタンドライトを離し、舞台と夕紀の間に滑りこむように入り込んだ。

「くっ」

頭と肩、二の腕に舞台がのしかかる。が、それよりも気になるのは、入り込む時に捻った左手首だった。

「くっ…早く、舞台を、起こして、くれ…っ！」

男子三人で移動させるものを一人で支えるのはいくら何でも無茶だ。特に帰宅部で、非運動系の俺にはかなり無理があった。

「「「いっせー、の、っせ！！」」」

体半分に掛かっていた重みが無くなると同時に、体中から汗が吹き出してきた。

「助かった…」

脱力と共に尻餅を着く体勢になったが、すぐにズボンに付いた埃などを払って立ち上がる。すると男子がこちらの様子を伺ってきた。

「大丈夫か？怪我とか」
「あ、ああ。ちょっとびっくりしたけど平気だよ」
「それにしても良く反応出来たな！」
「おい、その前にコレ移動させてたの誰だ？」
「ごめん僕達が…」
「ゴメン…」

申し訳無さそうに謝ってきたのは如何にも文化系の二人だった。

「お前達が二人で運ぼうとするなよな！」
「い、いやみんな忙しそうだったから…」
「俺等でさえ三人で運ぶのにお前等で運べるわけ無いだろ！？」
「怪我人でたらどうする…」

そんな会話を横目に俺は背後を見た。正直、立ち上がってから男子に囲まれている間も、夕紀が怪我して無いか気になって仕方がなかった。だが、過剰な反応をすると前の二の舞になりそうで怖く振り向くことが出来なかった。

「夕紀、平気!?」

案の定理恵が一番に駆けつけていた。きっと過剰に心配していたら鬼のような形相でこちらを見てきただろう。簡単に想像できる。

「うん、大丈夫。少し驚いたけど怪我はないよ」

その言葉を聞いて、背後の音に集中していたのを気付かれないように教室を出ようとした。

(ふぅ、良かった)

「ちょっと!!なんでこんな重たい物を作ったのよ!」

「え?」

理恵の発言に男子が唖然としたのが分かった。前から理恵の夕紀に対する過保護っぽさはあったが、俺のせいもあり、最近はそんな行動や性格が顕著に現れるようになったと思う。

しかしこの発言は酷かった。元々女子に頑丈な作りを要求されていただけに、男子は信じられないものを見たような眼で理恵を見ていた。

俺は一回目の経験があるから、理不尽な罵声もあまり気にならないが。

「なん…だよそれ!」

他の男子は普段の扱いもあって少々沸点が低く設定されていたようだ。が、

「これの責任者誰！？出てきなさいよ」

理恵は取り合わず、さらに文句を言うために男子のリーダーを探し出し、吊るし上げようとした。男子は木村の放った因縁に今にも声を荒げそうな雰囲気だった。

そんな中、俺は教室を出ようとしていた足を止めざるを得なかった。

「俺だよ」

何故なら責任者は勿論俺だ。なんせ設計図から、部材の組み方まで、俺が指示していたのだから。

「あんた…っ！！」

理恵は明らかに敵意を持った表情で俺の方を向いた。流石にそこまでの表情を向けられるほどだとは思わなくて苦笑をする。

「こんな重くして、倒れて誰か怪我したらどうするつもりなの！」

「演じてる最中倒れないように、重心を下にしてるから、滅多のことじゃ倒れないんだよ」

「実際倒れたじゃない！」

「それは移動中の不注意だろ。設計上の問題でも作った男子の責任じゃない」

「責任者なら移動する時も注意してなさいよ！」

「重いから移動は左右一人ずつ、中央に一人で三人。出来れば運動

系の部活やってる人間で。そういう話はしてあった」
「それに…」
「俺は制作の責任者にはなったけど、この人形劇全体の責任者になったわけじゃない。片付けに関してはその責任者の仕事だろ」
「その証拠に俺は、照明の片付けを全体責任者である木村に言い渡されてたんだけど？」

正直、どちらもほぼ言いがかりに近かったがある程度の正論を含めながら言った。本来ならきちんと話し合うべきなのだが、頭に血が昇っている木村を落ち着かせる時間も俺には惜しかった。
周りの男子に目配せして、残りの舞台移動と落としてしまった照明などの片付けを頼みながら俺は木村に背を向けた。

「ちょっと、何処に行くつもり！逃げるの！？」
「今回のことを担任に報告してくるだけだよ。制作責任者としてね」
そう言って足早に教室を出る。ギャーギャー騒いでいるけど、俺が居なくなれば落ち着いて騒ぎも収まるだろう。こういう経験も、今となっては懐かしい。

ガラッ

「失礼します」

担任に報告を済ませ、その足で保健室に行くと先客が居た。さっき足早に教室を出たのは、保健室で手首の様子を見て貰おうと思ったのだが。

「あ、藤田くん…」
「…大西か。怪我してたのか？」
「ううん。ちょっと、ね」
正直気まずい雰囲気だった。ここ最近ほぼ会話もなく、被害者と加害者の関係のように暗黙で距離を取っていた為、沈黙が夕暮れの保健室を包む。
「保健の先生居ないのか？具合悪いならベッド借りたらどうだ？」
ぎこちないけど、なんとか以前のような口調になれたと思う。多少声が震えていた気がするが、取り返しは付かない。
「違うの。その…さっき助けてくれたでしょ？」
「…助けたというか、咄嗟に身体が動いたってやつだけどな」
「その時、藤田くん手首痛めてなかった？左手」
「っ」
夕紀に気づかせて気を遣わせるのが嫌だったから、ああ言って自然に教室を出たつもりだったのに、どうやら気が付かれていたらしかった。
「いや、元から左手で作業してたから、それでちょっと、痛めてたんだよ。俺左利きだしな」
慌てて嘘を言った割には、それなりに説得力がある嘘が出たと思う。確かに最近はのこぎりばかり握っていたりしたから、左手は筋肉痛だったりする。左利きだというのも本当だ。
「でも…」

「気にすんな。湿布とかすると周りが軟弱だ、とか茶化してきて、五月蝿いからしてなかっただけだから」

詐欺師になれるんじゃないか？と思うぐらいペラペラと嘘が出てくる。だが嘘も方便というやつだ。

「あ、じゃあじゃあ！せめて湿布は私が貼るよ！」

手首が痛いのをバレたなら仕方ないと、湿布があるだろう棚を漁っていると、夕紀がそんなことを提案してきた。

「いや湿布ぐらい自分で貼れるよ」

「藤田くんがそうやって嘘ばっか言うから、私も勝手に責任感じて湿布貼りたいの。お詫びさせて？」

「いや分けわからないからその理屈」

「嘘だよ！私見たんだから。藤田くんが私を庇ってくれる時に手を捻ったところ」

格好悪くて仕方なかった。助けに入って余計に怪我するとか、恥ずかしい所を見られていたとは。

「とにかく大西は何も気にすること無いから。な？」

「貼ります！」

「いや良いから！」

「貼る！」

「貼るな！」

そんな騒ぎを数分していたら、保健室のドアがなんの予兆もなく全開になった。

「夕紀、怪我したって聞いたから保健室に来たんだけど！！…何してるの？」
「あ、佑樹くん…」
先輩だった。夕紀の彼氏である。
「心配したよ、怪我はない？」
「うん、私は怪我しなかったよ」
「私は、って事は怪我人いたの？」
「藤田くんが私を庇ってくれた時に、ちょっと手を捻っちゃって」
「藤田…？」
我関せずの心で気配を消していた俺を、先輩が見るのが分かった。刺さるような視線を頬に感じる。
「藤田…そうか君が藤田君か」
夕紀と話をしていた時の温和な表情から一変して、剣呑な雰囲気を出す先輩に、夕紀も驚いているようだった。
「佑樹くんどうしたの？」
「君が夕紀にちょっかいを出していた、藤田智之君か」
「…」
なるほど、俺の事はフルネームまで耳に届いていたわけだ。事実だから言い訳も出来ないけれども、彼氏本人から直接言われると、ちょっと胃の辺りが痛くなる。
「で、君が夕紀を助けたって？実は自作自演なんじゃないのかな？」

「夕紀の気を惹くために」

一瞬頭がカッと熱くなったがすぐに冷えた。言われて気が付いたが、確かにそうとも取れる状況だった。舞台の設計、制作は俺の指示のもと行われ、その舞台が偶然夕紀に倒れてさらに偶然にもそれを俺が助けた。

自作自演などと言われてもおかしくない流れがそこにはあった。勿論邪推されればの話で、そんな気は無かったが、以前俺がした行動を知る人が、一度思い浮かべば十中八九信用するほどの推理だった。

「ちょっと佑樹くん！酷いよそんなって」

「夕紀は少し黙っていてくれないか。僕は以前から少し頭に来ていたんだ」

「…」

「何か言うことは無いのか藤田君」

前からこの人は苦手だった。とても大人で、理性的で、夕紀を大切に思っていて、夕紀と別れるその瞬間まで男らしかった。

◆

放課後、部活も終わり人がほとんど残っていない廊下に三人の影が伸びていた。

先輩は寂しさと悔しさで瞳を滲ませながら口を開く。

『夕紀、夕紀が藤田君を選ぶというなら、僕に何か悪い所があったんだろう。これからはそれを直して、夕紀がいつか昔話をする時少しでも自慢出来る元彼になるよ』

しかし声を詰まらせること無かった。

『夕紀、幸せになってね』

「大西さんにちょっかいを出していたのは事実です。気分を悪くさせて、すみませんでした」

「認めるんだね」

「はい、ですが。今回の件は事故です」

「…どうだかね。僕は君を信じられない」

「っ！？佑樹くん！！」

夕紀が必死に先輩を諌めるが、先輩は聞かず俺を見つめる。しかし、俺はこの場をどう着地させるかよりも、昔先輩が言った言葉が胸に刺さって、ジクジクと痛かった。

（誇れる元彼に俺はなれていただろうか）

（別れる最後まで夕紀の幸せを願えただろうか）

「聞いているのかい？」

意識を内側に飛ばしていた俺に、業を煮やした先輩が、少し近付

いて声を掛けてきた。そこで漸く意識が現実に戻り、考えていたことが霧散した。
そして、どうこの状況を切り抜けようと頭が回転し始めた。
（とは言ったものの、今俺に非はないはず。ここは堂々と帰ろう）
「なるほど、ここは若いお二人に任せて私はこれで…」
「馬鹿にしてるのかい？」
ダメだった。真顔で行けば多少強引だが行ける気がしたんだけど、真面目な先輩には効かなかったようだ。夕紀はそんな俺の態度に少し面食らっていたようだ。こういう修羅場は何度も経験しているため無駄に耐性が高いのが災いしたようだ。
「いえ、俺なんかに構ってるよりも恋人同士で、有意義な時間を過ごしたほうがいいのでは？という、率直な意見だったんですけど」
「ほら、大西さんもそう思って居そうですよ？」
「夕紀？」
急に振られた夕紀がしどろもどろになっている。その内に、素早く湿布を拝借し逃げるように保健室を出た。
背後から呼び止める声がするが、復活した夕紀がなんとか引き止めてくれているようだ。夕紀としてもここで事を荒立てたくないのだろう。
「なんか逃げる事多いな…」
そんな情けない事を思い返しながら俺は湿布臭くなった廊下を昇降口目指して歩き始めた。

夕紀と先輩が大喧嘩をしていると聞いたのは、そんな文化祭が終わってすぐのことだった。

第二話　二度目の失敗（後書き）

ファーストコンタクト、ファーストインプレッションってとても大事

第三話　二度目の後悔

「で、原因は何か噂になってるのか？」
「いんや、今回はちょっと根が深いらしい、ってぐらいしか噂されてないよ」
「そっか」

屋上へ続く階段に座りながら、昼飯用に買ったパンを片手に幼なじみから最近の噂話を聞いていた。屋上は閉鎖されているため、ここは滅多に人が通らない絶好の昼食スペースだった。

「トモが改心して大人しいから、原因が予想できないんだろうね」
「おい、失礼すぎるぞ」
「だって、それほど衝撃的だったから、あの時のトモ。急に人が変わったようになって、アレだったし？」
「そんな変わったか俺」

確かにあの日、突然高校生に戻った時から、冷静な行動を取れていたかと言えば自信がないけど。しかし俺と同じ状況になって冷静で居られる人間が居るだろうか。

「変わったと言うか、なんか急に大人になったと言うか、でもたまに子供っぽかったりしたり変な感じだったかな」
「？例えば？」
「大西さんに関する事だけ自信過剰と言うか思い込みが激しかったと言うかそんな感じだったね」
「あー…なるほどね」

前回の記憶があるせいで、余計な自信や油断があったのだろう。

「俺としても、いつトモが大西さんに惚れたのかが、分からないぐらいの急な変化だったし、聞いた時はビックリしたんだからね？」

まぁ確かに。本来ならあの時期は、まだ全然夕紀の事を知らなかったはずだからな。

それを未来を知ってる俺が歪めた結果が今の状況か。本当に自業自得だな。

「そのくせ、それ以外の事だとやけに落ち着いてて、言うことも的確だしさ？」

「そうだったか？」

まぁ中身は成人して数年経ってる社会人なわけだしな。ここらで一回俺の状況を洗いなおしてみるかな。

―名前は藤田智之。元々の年齢は二十六歳。大学卒業後、父親の会社に就職して、二代目となるように日々雑用をこなしていたと。会社はデザイン関係の仕事を中心にインテリアからエクステリアを扱っていた。まぁ所謂職人家系だ。

夕紀とは高校三年で別れたきり。とある事情で高校時代問題児とされて、嫌われ者になったので同窓会にも呼ばれず、そのまま一度も会うことはなく、あの日再会した。

そして二度目のチャンスに浮かれあんな失態を犯してしまったと。そりゃ今まで大して親しくなかったクラスメイトに、あんなこと言われたら気持ち悪いに決まってる。

そこまで思い返して頭を抱えていると、

「まぁ、でも最近はなんだか良い感じに落ち着いて、評判も悪くないよ？」
「は？」
「ほら、あの大西さんを助けたってアレ？なんか俺のクラスの女子が聞いてキャーキャー言ってたよ？」

ニタニタと笑いながら肘打ちをしてくる。しかしその顔も曇り、少し考え込み始めた。

「でもバド部の男子がちょっと変なこと言ってたかな」
「ははっ、今度はどんな陰口だ？」

人気者に手を出すと、吊し上げと言うか晒し上げというか、本当に大変だ。

「いや、あの事故がトモの仕業だとかなんとか。いや、俺はそれ聞いて笑ったんだけどね？」
「…俺の仕業…か」

なんだか夕紀と先輩の喧嘩の原因が見えてきたような気がした。こいうところが自意識過剰で自信過剰だとは思うけど。
夕紀は裏でコソコソするのが嫌いだったはず。陰口やら裏工作なんてもっての外だ。

「そんなトラップを予め仕組めるなんて、余程レベルの高い罠師じゃないと出来ないよ」
「祐也、お前はゲームのやりすぎだ」

しかし、予想が当たっていたら俺の行動が、周囲の人間を歪めている気がした。

夏以降まるっきり声を掛けてくることが無い幸宏や、過剰に夕紀を守ろうとする理恵、嫉妬や猜疑心に我を忘れているような先輩。
俺が変えてしまった人達を思い浮かべながらこれからの行動は慎重にすることを決めた。

（願わくは、これから先夕紀が幸せな未来に繋がりますように）

夕紀を一番傷付けている自分の事を棚に上げ、こんな独善的な事を願っている自分に苦笑いしながら、パンを口に詰め込む。

◇

「生徒会副会長に立候補しました大西夕紀です。よろしくお願いしまーーーす！！」

授業も終わり祐也と、その友人数人で体育館の下、ピロティになっているスペースを使っていた。そこで部活代わりに球蹴りして遊んでいたら、昇降口の方から大きな声が聞こえた。
ちなみに球蹴りというのはサッカーともフットサルとも言えないようなボール遊びだ。

「トモ、姫さまが選挙活動してるよ？応援しないの？」

忌々しいことに最近、祐也は俺が夕紀のことでも落ち着いているからか、夕紀のことで茶化していじる遊びを覚えたようだ。

「よく見ろよ。あんな所に俺が行ったら袋叩きだぜ？」
「ああ、親衛隊かぁ…」

夕紀の周りには〈生徒会副会長候補・大西夕紀〉と書かれたのぼりを持った、選挙活動を支援する集団がいた。勿論筆頭は理恵。その周囲にはうちのクラスの男女数人居て、バド部が一人、二人混ざっている。

「あれじゃやりづらいだろうな、あの子も」
「ああも周囲に睨み効かせられると、ちょっとね」

祐也の友人が言う通り、選挙活動を支援するはずが支援者醸しだすピリピリとした雰囲気のせいで、人が寄り付かない悪影響が出ていた。

「大西さんも良い人過ぎるよね、善意で手伝ってくれてるから断れないんだろうな～」
「本末転倒ってやつだな」
「そうそう、七転八倒だね～」
「……」

周囲の空気が和んだ所で、こちらが騒がしくなったから夕紀がこちらに振り向いた。

「っ」

息を飲んだのは俺か、横に居た祐也か。

「ありゃ重症かも」
「祐也も見えたか？」

何が原因でそうなったか、それとも色々積み重なってそうなった

のかは分からないが、夕紀の顔にはひどく疲れたような笑顔があった。いつもニコニコと周りを明るくさせるような笑顔ではなく。

「でも今の俺には何も…」

出来ない、という言葉を飲み込んだ。もう俺は近付く事すら出来ない。理恵は夕紀と先輩の喧嘩の原因を知っているのか、以前にもまして俺を厳しくマークしている。最近では俺の周囲に居る友人もそれとなくマークされているようだった。

「トモのせいじゃないから気にしちゃだめだよ？」

「ああ…」

とは答えたが、大元の原因は俺にあるだろう。そのことに気がついて励ましているのか、それとも単に俺を気遣ってなのか、やや天然が入ってる幼なじみの言動は分からないが胸が苦しくなった。

「生徒会副会長に立候補しました大西夕紀です。よろしくお願いします！！」

◆

夕紀は教壇の前に立ち、クラス全体に概要を説明している。

『今年から開催される、生徒会主催の球技大会の説明は異常です！』

この秋発足された新生徒会は異例の速さで初仕事を開始した。

それがたった今説明された〈生徒会主催球技大会〉だ。

『今年は準備期間が短かったから内容はあまり凝ったことはできないけど、来年は期待しててよね？』

その自信は何処から来るのか、女子の平均より少し小さい体型を目一杯大きく動かしながら、クラスメイトから挙がる質問に楽しそうに答えている。

『副会長さんになんでも聞いてよね！』

そこにはもう、ただ笑顔が似あっているだけの明るく人当たりのいい女の子の姿は無かった。それがとても眩しくて切なかった。

◇

廊下に張り出された、新生徒会役員の名簿を見ようと、数人の生徒が掲示板に集まっていた。

廊下の窓側に寄りかかり、人が少なくなるのを待っていた俺に横から声がかかった。

「よう」

幸宏だった。数カ月ぶりに声をかけられ、少し驚いたが、いつもだったら悪ガキのようにニヤニヤしている幸宏の顔が、やけに真剣だったので表情を整えた。

「どうした？最近忙しそうだったじゃないか」

「まぁ色々な…」

疎遠になったというわけではなく、忙しかったと言い換えたのは、俺なりの配慮だった。こうしてまた接点が持てたのだからとやかくは言うまい。

「張り紙見たか？」

「いや、人が多いから“待ち”だよ」

「そうか」

なにやら考え込んだ幸宏が気になったが、そろそろ人も少なくなってきたので張り紙を見るため腰壁から身を離す。

「あまり気にするなよ…」

そう言って幸宏は、現れた時と同じように静かに離れていった。

「気にする？」

何についてだろう、と考えながら新生徒会の名簿を見ると。

そこには大西夕紀という名前は無かった。その代わりに他の生徒の名前が生徒会副会長の横に書いてあった。

「これは…」

一体何が起きたのか理解が追いつかなかった。

俺の記憶では二年次、生徒会副会長は夕紀のはずだった。そこで夕紀は様々な企画や行事を決め、生徒にも、教師にも信頼される学校を代表するような生徒になっていった。

「その機会が無くなったのか」

原因は俺だ。どう思い返しても、事の発端は俺に辿り着く。あんな不自然な行動を取ったから、何もかも歪みだしたんだ。

昼休み、食事も終えて残りの時間をぼーっとしていると

「さてと～。今日はどうする？」

何処か抜けたような声で一緒に昼食を採っていた祐也が話しかけてくる。あの日から俺は、ずっと夕紀と距離を取っている。以前の全く逆だ。朝はなるべく遅く教室に入り、昼はすぐに教室を出て祐也や友人と合流し、放課後も教室に残らずさっさと昇降口へ行く。これ以上夕紀になにか影響を与えてしまわないように。

「さあな、またいつも通り気の向くままに球蹴りでもするかな」

「了～解」

そう言って祐也はボールを取りに校舎へ戻っていった。

祐也が戻るまで俺は、二階に位置する体育館の脇をぐるりと一周している通路から、外を眺めていた。

「…」

ここからなら校舎から来る祐也には目立つが、体育館の下のピロティや校舎一階からは見えない。すると他にも生徒が居たのか俺が居る通路を曲がった先から、女子の話し声が聞こえた。

「…さん、分かったわね？」
「でも、そんなこと言われても…」
「なに？先輩の言うことが聞けないの？」

何やら先輩が後輩をいびっているようだった。

（学生生活は人生の縮図なんてよく言ったもんだな。ＯＬみたいだ）

「あんたが現れなかったら佑樹だって私を捨てたりしなかったんだから！」

女のヒステリックはきっついな、なんて思っていると相手の女の子が喋り始めた。

「先輩は間違ってますよ…本当に好きなら私をどうにかするんじゃなくて自分が変わらなきゃダメですよ…」
「くっ！！」

バチンッ

そう音がすると足早に去っていく音が聞こえた。それにしても、何処かで聞いたことのある声だった。少し顔を見ようと足を踏み出した所で。

「トモ～早く下に降りて来なよ～」

状況を見ていたかのようなタイミングで祐也が俺を呼んできた。通路の向こうの女子に、立ち聞きしていたことに心の中で謝りながら、無言で祐也の呼んでいる場所へ向かった。

その後も俺は同じサイクルで日常を費やしていった。
今の俺にはそうして被害を小さくする事しか考えつかなかったし、出来なかった。

しかし、一度歪んで縺れた関係はそう簡単には元に戻らなかった。

「藤田！」
「んあ？」

高校二年の目玉である修学旅行も、男子とはっちゃけてグズグズに終わり。今日で期末試験も終わったところだったので、放課後の今は精も根も尽き果てた状態だった。なので、間抜けな声が出ても仕方ないのである。

「あんたのせいで…っ！！」
「なんなんだ？テスト疲れであまり話をしたい気分じゃないんだけど」

自慢の黒いショートカットを、プルプルと震わせながら声を荒らげたと思ったら、今度は何かを堪えるかのように声を搾り出すように理恵は言った。

「夕紀が先輩と別れたわ！」
「は？？」
「さっきあたしの所にメールがあったの！今日で先輩と別れたって

！」

なぜ？と言う言葉は発せられなかった。理恵が俺のところに来た事からしても明白だったからだ。

「でも、俺はもう関わってないぞ？」

「あんたは気が付いていなかったかもしれないけど、ずっと監視してたのよ」

「誰が？」

「先輩が…」

少しの無言の後、理恵が今までの鬱憤を晴らすかのように喋り始めた。

「修学旅行。あんた男子とずっと一緒だったでしょ？」

「ああ、男子と居るほうが楽だったし」

勿論嘘は言ってない。高校生活で女子との色恋沙汰が無ければ、一番機会が多いのは同性同士での馬鹿騒ぎだろう。特に前回の高校生活での反動からか、最近は友人との時間を目一杯楽しもうとしている。

「その男子の中に先輩が監視を頼んだ人間が何人か居たのよ…」

「え？」

なぜ？と言う疑問と、どうして？と言う悲しみが浮かんだ。

「生徒会選挙に落ちてすぐ、修学旅行があったでしょ？だから、傷心の夕紀をあんたがちょっかい出すんじゃないかって」

確かに役員発表と修学旅行の間には、中間テストを挟むだけでほとんど間隔はない。

「テストもあったから夕紀とあまり話せなかったんでしょ。それで修学旅行。三泊四日とは言っても、自分の目が届かない所へ、あんたと夕紀を行かせるのが嫌だってね」

「でもそんな気はさらさら無かった」

「あんたはそうでも、先輩は違ったのよ。ほら、文化祭の時あんたが夕紀を自作自演で助けたって前科もあるし」

「自作自演なんかしてないぞ！」

「でも証拠がないから…」

「証拠なら！自作自演って証拠も無いだろ」

「そうなんだけど…」

言っていて自分の話がおかしくなっている事を薄々気が付いたのか、理恵は話し始めた補機よりも少し大人しくなってきた。

「とにかく、それが夕紀にバレちゃったのよ。誰がバラしたのか分からないけど、夕紀が先輩を怒って泣いての大喧嘩。私も一度は宥めたんだけど、実はそれ以前からもちょくちょくあんたの事をクラスの男子に聞いていたらしくて。それのせいで夕紀がもう聞く耳持ってくれなくて…」

「正直なんであんたなんかを庇うのか分からないけど、今思えばなんであんたをこんなに責めていたのかも、分からなくなってきたわ…」

疲れをため息と一緒に吐き出すかのように、理恵は肩を落とした。

「そうだったのか…」

道理で俺について詳しかったはずだ。今思えば文化祭の時も、何故だか先輩は俺が舞台を作ったことを知っている雰囲気だった。アレも、クラスのバド部に聞いていたのだろう。

「理恵！こんな所に居たの！」

俺と理恵が、二人して何とも言えない空気になっていると、理恵が開けっ放しにした教室のドアから、夕紀が現れた。

「夕紀…」

驚く理恵をよそに、夕紀は足早に机の間を抜け、理恵に近付き手を取った。

「早く帰ろ??」

夕紀は俺の方を一切見ず、理恵を引き摺るようにして教室を出ようとした。

「大西」

思わず掛けてしまった声に、夕紀は一瞬ビクンとして立ち止まった。理恵は余計なことを言うなといった面持ちでこちらを見てくる。

「…なにかな？藤田くん…」

「…」

理恵も思わず息を飲む中、俺は何も考えず口を開いた。

「大西、木村。また明日な」

これが俺にとって夕紀に掛けた最後の言葉になった。

◇

一年と四ヶ月後。

あの日声を掛けてから俺は、それまで通り男子を中心に高校生活を送った。

あの日から変わったことと言えば、夕紀の周りに居た親衛隊のような女子集団から、目の敵にされなくなったことぐらいだ。

それも最早なんの意味もなかった。何故なら俺は、あの日を境に夕紀とその周囲から積極的に距離を取り、学年が上がった後はクラスも離れたことから、余計に接点が無くなったのである。

そして今日

俺達は卒業の日を迎える

二度目の後悔を胸に秘め

俺は卒業をする

しかし、この時の後悔が数年後、さらに激しい後悔に成長することになった。

第三話　二度目の後悔（後書き）

距離を取ることが正解とは限らなくて

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8886x/

俺が望む最高のハッピーエンド

2011年11月17日20時54分発行